

旅夜懷を書す（杜甫）

細草 微風の岸

危檣 独夜の舟

星 垂れて 平野 闊く

月 湧いて 大江 流る

名は 豈に 文章もて 著われんや

官は 応に 老病にて 休むべし

飄々 として 何の 似る 所ぞ

天地の 一 沙鷗

細草微風岸 危檣獨夜舟  
星垂平野闊 月湧大江流  
名豈文章著 官應老病休  
飄飄何所似 天地一沙鷗

解説 旅の夜、舟の中での感慨をうたったもの。

語釈 ※書懷 || 思い感じたことを書く。 ※危檣 || 高い帆柱。危は高い。 ※独夜舟 || 家族の者はみな寝静まつて、自分一人だけが起きている舟。 ※星垂 || 星が降るようにきらめいているさま。 ※月湧 || 月光が川の流れに映って揺らいでいるさま。 ※名豈文章著 || 自分の名前は文学のうえであらわれるとは思わない。 ※官 || 杜甫は嚴武の推薦で、節度参謀・檢校工部員外郎（土木工事などを掌る下級の役人）となっていたが、永泰元年に官を辞した。 ※飄飄 || さまようさま。 ※沙鷗 || 砂原の鷗。

通釈 細い草がかすかな風にゆれている岸辺に舟を泊し、高い帆柱の舟に自分一人はまだ寝ないでいる。星はきらめき平野は広々とひろがって見え、月は水面に映り、長江はきらきらと流れている。自分の名前は文学の上であらわれるものだろうか。また、老いて病気の身では官職から退くのも当然であろう。あちらこちらとさまよい続けるこの自分は何に似ているかと言えば、それは天地の間をさまよう一羽の、砂浜の鷗である。